

知識探訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

アラブ地域における東南アジアからの留学生

山口元樹 (東洋文庫研究員)

今年の2月末、エジプトに留学中のマレーシア人126名が有効な学生ビザを所持していないという理由で当局に拘束されるという出来事があった。結局、そのうちの104名が国外退去処分を受けマレーシアに送還された。この出来事の原因は、学生が所属していた教育機関が必要な手続きを怠っていたことにあるらしい。エジプトに留学しているマレーシア人は、近年様々な困難に直面している。ここ数年のエジプトは政情不安が続いている上、近年のリンギ安は留学生の生活を苦しめている。しかし、このような状況にありながらも、1万1,000名ものマレーシア人が現在エジプトで学んでいる。

マレーシアをはじめ東南アジアのイスラーム教徒は、昔からイスラーム世界の中心であるアラブ地域に強い憧れを持ってきた。マレーシアやインドネシアなどの出身者は、歴史的にはアラビア語で、インドネシアのジャワ島に由来する「ジャワ」や「ジャウィー」と一括して呼ばれてきた。近代より以前に、地理的に遠く離れたアラブ地域に行くことができた東南アジア出身者はごく少数に限られていたが、交通機関の発達によって状況は変化していった。19世紀後半にインド洋の海上交通で蒸気船の利用が拡大して以来、東南アジアからアラブ地域への人の流れは大きく増加した。

ただし、19世紀末までは、東南アジアのイスラーム教徒にとってのアラブ地域における学問の中心地は、エジプトではなくイスラームの最大の聖地メッカであった。学問を志してメッカに渡った東南アジアのイスラーム教徒の中には、数力月から長い場合には10年以上滞在する者もいた。そのような長期滞在者の中からは、学識を認められアラブ地域で広く名声を博するイスラーム学者もあらわれた。また、20世紀前半のマレーシアやインドネシアにおけるイスラーム運動で活躍する多くの人物もメッカで学んだ。

エジプトに留学する東南アジア出身者の数が増え始めるのは、20世紀に入ってからのことであり、1920年代になってその数は100名以上になった。留学生たちは、自分たちの相互扶助団体を結成したり、マレー語の雑誌を発行したりした。エジプトが東南アジアから学生を引き付けるようになった一つの理由として、メッカと比べて宗教的な学問とともに近代的な学問を学ぶのに適していたことが挙げられる。当時のエジプトの首都カイロには、スンナ派イスラームの学問の中心

であるアズハル大学に加えて、ダール・アル=ウルム(教員養成学校)やエジプト大学(現在のカイロ大学の前身)といった近代的な教育機関が設立されていた。また、エジプトは、著名なイスラームの思想家ムハンマド・アブドゥやその弟子のラシード・リダーが主導したイスラーム改革主義運動の中心地でもあった。東南アジアのイスラーム教徒は、イスラーム世界の中心における新しい運動に強い関心を示した。

東南アジアから留学生は、アラブ地域のイスラーム運動の影響を自分たちの出身地に伝える仲介者としての役割を果たしてきたと言える。アラブ地域に留学するというと、現在ではイスラームの過激思想に染まるというイメージを持つ人もいるかもしれない。しかし、アラブ地域におけるイスラーム思想も一樣なものではなく、東南アジアからの留学生は様々な潮流に触れている。今後も、エジプトやメッカで学んだ留学生たちは、東南アジアのイスラームの発展に大きな役割を果たしていくであろう。



カイロにおけるインドネシアからの留学生 (1925年)

<出所: Mahmud Junus, Sedjarah Pendidikan Islam di Indonesia (Jakarta: Pustaka Mahmudiah, 1960)>

<筆者紹介>

1979年生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科修了。博士(学術)。現在は公益財団法人東洋文庫研究員。専門はインドネシア近現代史。アラブ系住民の活動を中心に19世紀末から20世紀前半のインドネシアにおけるイスラーム運動とアラブ地域との関係を専門に研究している。